

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：15301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22446

研究課題名（和文）国立ハンセン病療養所の住宅計画の変遷にみる居住環境の形成過程

研究課題名（英文）The Changes in Housing Planning and Living Environment in National Hansen's Disease Sanatoria in Japan

研究代表者

パク ミンジョン（Park, Minjeong）

岡山大学・環境生命科学学域・特任助教

研究者番号：80881094

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：医療施設ではなく居住施設としてのハンセン病療養所の機能に着目し、社会背景や居住者ニーズの変化に対する入所者住宅の変遷について調査を行った。患者住宅の数や立地、入所者数や年齢構成の推移、施設整備状況などから各療養所の住宅計画を明らかにし、全体の傾向やそれぞれの施設特性について分析を行った。同じ制度下で設置、運営された施設であっても建設時期や立地状況によって異なる特徴が見られ、療養所に対する各々の思想が施設計画に現れる事例が確認された。これらの特徴は施設の拡大、縮小など変革期において顕著に表れる傾向にあり、今日では終の住処の選択や外部への施設開放などの面で違いが表れることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

全ての施設は目的と用途に応じて計画されているため、療養所の住宅計画の変遷を追うことは、近代の衛生政策と患者の療養生活の関係を明らかにすることであり、建築計画史の側面において重要な意味を持つ。これまで個々の療養所に対する調査は行われてきたが、国立療養所13か所を網羅的に調査するのは初の試みである。ハンセン病療養施設の建設は諸外国でも多数確認されており、特定の療養所や時期に限らず全体像を明らかにしたことで、国際社会における日本の療養所の位置づけを明確にするための基礎的データとしての役割が期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the function of Hansens' s disease sanatoria as residential facilities, not medical facilities, and investigated the changes in housing in response to changes in social background and residents' needs. The housing planning of each sanatorium was clarified and the overall trend and characteristics of each facility were analyzed, based on the changes in patient housing, population, age composition of residents, and facility maintenance. Even facilities installed and operated under the same system were found to have different characteristics depending on the construction period and location conditions. Also, it is confirmed that ideal facility image of each sanatorium is reflected in each plan. These characteristics tend to be noticeable during the period of change, such as the expansion and reduction of facilities. In recent years, differences appear in terms of choosing the final abode for residents and opening the facility to the outside world.

研究分野：建築計画

キーワード：ハンセン病 国立療養所 居住環境 住宅計画 入所者 患者住宅

## 1. 研究開始当初の背景

ハンセン病は神経の麻痺、顔や手足の変形、失明などの症状を伴う感染症で、日本では1907年に「癩子防二関スル件」が施行されて以来1996年に「らい予防法」が廃止されるまで約90年にわたり隔離の対象とされてきた。その政策を支えたのは今も全国13カ所に残されている国立療養所である。特に日本のハンセン病療養所の存在はその数や規模において世界でも群を抜いており、特有の現象と言える。しかしその過程や背景に関する建築学の研究はほとんどなく、およそ100年にかけて療養所を取り巻く環境が様々な変化を見せる中、隔離政策が維持されたという事実以外に施設が継続できた理由について語れる要因がないのが現状である。

現在のハンセン病療養所にハンセン病患者の姿はない。1950年代以降、国内でも治療薬が普及し、回復した入所者の中には退所する者も現れた。今でも療養所に暮らすのは後遺症による障害を抱えた後期高齢者らである。かつては収容しきれないほどの入所者を抱えた療養所も今では空家が大半を占め、平均年齢87歳を超える<sup>注1</sup>限界集落と化しており、この現象はハンセン病療養所という施設区分を除けば今日の地域社会が抱える社会問題とも共通しているのではないかという点が本研究の着目点である。まちの拡張と縮小、高齢化、空家の増加、集約といった課題について、ハンセン病療養所が時代の先端を走るものと捉え、人々の生活の根幹である住宅の変遷をたどることにより、今後の社会への知見を得ることができると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では医療施設としてではなく居住施設としてのハンセン病療養所の機能に着目し、社会背景や居住者のニーズの変化に対応してきた住宅計画の変遷について明らかにすることを目的とする。計画立案者や施設管理者の視点だけでなく居住者の立場から、新天地で生活を開拓していく様子やその背景にある制度を明らかにし、今日まで入所者の居場所としてあり続けたハンセン病療養所の実態について精査する。

## 3. 研究の方法

ハンセン病療養所の施設研究においては、個々の療養所に調査範囲が限られておりその全体像はつかめていないのが現状である。また、治療薬が開発されて以降、海外主要国で隔離廃止の動きが主流となる中、隔離の強化、維持の姿勢を貫いた日本特有のハンセン病政策が展開された時代に関する学術的研究はまだあまり進んでいない。

そこで本研究では、全国に13カ所ある全ての国立療養所を対象に、施設の設立から現在に至るまでの期間における住宅計画の変遷を調査した。これまでの研究から、住宅に特化した施設計画は別途行われていないことが明らかになっているため、施設全体の管理計画文書をもとに住宅関連項目を抜粋した。具体的には、年報、白書、配置図、施設整備計画書、写真、入所者手記などの資料から、療養所の立地選定過程をはじめ施設計画、収容計画、人口統計、住宅分類及び使用状況などの情報を収集し、分析した。

当初、文献調査とインタビュー調査を並行して行う予定だったが、新型コロナウイルス感染症の拡大により高齢者施設であるハンセン病療養所での調査実施が困難となり、文献調査を中心とした手法に変更した。

## 4. 研究成果

### (1) 国立ハンセン病療養所の住宅計画に関する記録の体系化

これまでハンセン病やハンセン病療養所に関する文書は閲覧できる対象として認識されておらず、あまり研究が進んでいない。また、医学や法学、社会学などの分野が中心となっており施設に関連する文書の有無も明らかにされてこなかった。本研究では、公に出版されている資料に加え療養所で作成された文書をできる限り収集し、国立ハンセン病療養所の変遷、とりわけ住宅計画の変遷を体系的に整理することを試みた。

資料は、国立ハンセン病資料館、国立国会図書館、長島愛生園神谷書庫及び図書室を中心に個別療養所を通して収集した。敷地面積や建築面積、延床面積、建物棟数など施設概要のほか、入所者数及び年齢構成、配置図や住宅図面、使用状況に関する情報を対象とした。記録の保管状況は療養所によって大きく異なり、その背景には自然災害や火災、戦争などの影響が指摘されている。また、記録方式にも差異が見られ、大まかな項目や記載順序は共通しているものの、細目単位では扱う情報量に差があり直接比較ができる水準ではなかった。敷地面積は全ての療養所の全ての時代の資料で確認できた反面、建築面積と延床面積に関してはどちらか片方の記載しかなかったり、年度ごとに記載する項目が変わったりと時系列での比較が難しい事例が見られた。住宅に関しては、ある年は延床面積、ある年は棟数、またある年は室数を記載するなど、同一の療養所であっても作成項目にゆれがあり正確な変遷をたどることが難しい事例があった。

一方で、数値化された記録は、図や文章で表現された記録と合わせて分析することで後者の記録の客観的根拠として提示できることが明らかになった。配置図は、施設全体の変遷を把握するうえで一番わかりやすい表現である反面、正確な縮尺で書かれているものが少なく、建物名や凡例が記載されていないものも多い。異なる基準で作成された資料を総合的に照合することで、情報を精査し、記録の体系化を図った。

### (2)長島愛生園の患者住宅整備過程

全国の国立療養所と対象として調査を進める中で、長島愛生園においては、年度別に作成された資料がまとまりのある状態で保管されており、経年変化の詳細を分析することができた。開所翌年の1931(昭和6)年から1958(昭和33)年まで発行された年報と1958(昭和33)年から1989(平成1)年までの土地建物等調を中心に、施設管理費申請書、10年ごとに発行される周年記念誌などの資料から住宅類型と建築及び解体時期、立地情報を収集し、1930年代から2020年に至るまでの入所者住宅の変遷を明らかにした。住宅供給期(1930-1950年代)、老朽住宅整備期(1960-1980年代)、住宅減少期(1990年代以降)と大きく3つの時代特性に分類され、住宅の立地は時代背景や地理的条件によって決定されていることが分かった。今日では高齢の入所者の介護と看取りが住宅整備に影響を与えている。中心地区への集約が進められ、介護職員が常駐する介護棟が集まる地区へ給食棟及び治療棟の移転が完了している。

### (3)長島愛生園と他療養所の比較

一方で、資料の欠如により長島愛生園のように全期間の変遷を追うことができなかった他の国立療養所に対しては、確認できる範囲で長島愛生園との比較を試みた。

長島愛生園は最初に建設された国立療養所であるが、現在13か所ある国立療養所全体で一番古いものではない。これは、長島愛生園設立以前に公立療養所として建設された5か所の療養所が後に国立移管となったため、設立順では6番目に当たる。これらの5か所の療養所から長島愛生園へつなげる計画的要素の有無を調べた結果、愛生園の初代園長光田健輔の思想が深く反映されていることが明らかになった。光田健輔は日本のハンセン病研究の第一人者としてこれまでも様々な分野で注目されてきた人物である。隔離政策を強く推進した人物として知られているが、療養所の施設計画や運営面では、日常生活の場を提供することで療養所の中に入所者の居場所を作り、隔離した患者が再び社会へ戻ることを防ごうとした。公立療養所にはなかった園内結婚の推奨や小規模住宅の建設などが代表的な事例である。

さらに長島愛生園設立以降に建設された療養所まで範囲を広げると、長島愛生園の事例が特殊であることが明らかになった。長島愛生園には民間からの寄付による小規模住宅が数多く建設されたが、自由診療区が併設された栗生楽泉園を除き、同様の住宅が建設された事例はほとんど見られなかった。平地の確保が厳しかった長島愛生園と異なり、他園では大規模な住宅も建設しやすい環境にあったことに加え、管理の効率面から普及しなかったと考えられる。一方で、長島愛生園を含め全国で共通した住宅様式も確認された。

また、療養所の地理的条件は、住宅の規模だけでなく配置にも影響していることが明らかになった。各療養所の配置図から住宅が建てられた順序とその立地を調査したところ、敷地の拡張が可能な療養所、敷地に余裕がありかつ平地が確保できる療養所、敷地には余裕があるが平地が限られている療養所の3つの類型が見られ、前者2つの類型と後者では宅地開発において異なる特徴が確認された。

注1 2022年5月1日現在の国立ハンセン病療養所入所者数及び平均年齢(厚生労働省発表)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 PARK Minjeong	4. 巻 88
2. 論文標題 THE CONSTRUCTION PROCESS AND CHARACTERISTIC OF PATIENTS' HOUSING IN NAGASHIMA-AISEIEN, THE NATIONAL SATATORIUM IN JAPAN	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6. 最初と最後の頁 68～78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.88.68	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Minjeong Park, Toshio Otsuki	4. 巻 19
2. 論文標題 The Formation Process and Changes in Patients' Housing in Nagashima-Aiseien, the First National Sanatorium in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of the 19th International Planning History Society Conference	6. 最初と最後の頁 477～488
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7480/iphs.2022.1.6478	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 パクミンジョン
2. 発表標題 国立療養所長島愛生園における十坪住宅の登場と患者住宅整備の変遷
3. 学会等名 2022年度日本建築学会大会（北海道）学術講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Minjeong Park
2. 発表標題 The Formation Process of Hansen's Disease Sanatoria in Japan and the Characteristics of the Sanatorium Environment
3. 学会等名 International Conference of Asian-Pacific Planning Societies 2022(Nagasaki)（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Minjeong Park, Toshio Otsuki
2. 発表標題 Formation Process of Treatment Environment for Hansen's Disease in Japan and its Uniqueness
3. 学会等名 The 4th International Conference of the East-Asian Society for Urban History & 2nd International Conference of the HK+ Institute for Integrated Medical Humanities (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Minjeong Park, Toshio Otsuki
2. 発表標題 The Formation Process and Changes in Patients' Housing in Nagashima-Aiseien, the First National Sanatorium in Japan
3. 学会等名 The 19th International Planning History Society Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関